1　ベトナム中が涙した日本の少年

東日本大震災直後の３月 16 日、福島県に派遣された一人の警察官がいました。

彼は在日ベトナム人の両親を持ち、日本に生まれ、人のために働きたいと帰化して警察官になった方でした。

その彼が派遣された場所は、福島第一原発から 25km 離れたある被災地。忘れもしない３月 16 日の夜です。

彼は被災者に食料を配る手伝いのため向かった学校で、9 歳だという男の子に出会いました。

寒い夜でした。なのにその男の子は、短パンにTシャツ姿のままで、食料の分配の列の一番最後に並んでいました。

気になって彼は、その少年に話しかけました。それは、長い列の最後尾にいた少年に夕食が渡るか、心配になったからでした。

少年は、ぽつりぽつり警察官の彼に話し出しました。

少年は体育の時間に地震と津波にあいました。近くで仕事をしていた父が、少年を助け出そうと学校に駆けつけようとしていました。

しかし、少年の口からは想像を絶する、悲しい出来事が語られたのです。

「父が車ごと津波に飲み込まれるのを学校の窓から見た。海岸に近い自宅にいた母親や妹、弟も助かっていないと思う･･･」と話したのでした。

家族の話をする少年は不安を振り払うように首を振り、溢れ出る涙をふきながら、声を震わせていました。

口惜しさと、細さと、寒さで･･･

警察官は自分の着ていた警察コートを、脱いで少年の体にそっと掛けました。

そして持ってきていた食料パックをその男の子に手渡しました。

遠慮なく食べてくれるだろうと思っていた警察官が眼にしたのは、受け取った食料パックを配給用の箱に戻しに行った少年の姿でした。

唖然としている警察官の眼差しを見つめ返して、少年はこう言ったのです。
「ほかの多くの人が僕よりもっとお腹を空かしていると思うから…」
警察官の彼は、少年の顔から目をそらしました。それは、忘れかけていた熱いものが、一気に湧き上がってきて、抑えきれないあふれる涙を少年に見られないために…
「それにしても…髪にも白いものが目立つほど人生を歩んできた自分が恥ずかしくなるような…、人としての道を…、こんな小さな男の子に教えられるとは…
わずか9歳の男の子…しかも、両親をはじめ家族全員が未だ行方不明で、心細いだろう一人の少年が、困難に耐え、こんな小さな子供のころから、他人のために自分を犠牲にすることができる日本人は偉大な民族であり、必ずやより強く再生するに違いない…」と、彼は心から思ったのでした。
この少年の行動を、自分の胸の中だけにしまっておくには、あまりにももったいない話だ…。いや、誰かとこの自分の感動を分かち合いたかった。」
彼はベトナムの友人に、自分のこの体験を打ち明けました。ベトナムの友人も感動して、祖国の新聞記者にこの話を伝えました。記者は次のような記事を新聞に載せて少年と日本を称賛しました。
「警察官である彼が、ベトナムの友人に伝えた日本人の徳と強固な意思を象徴する小さな男の子の話に、我々ベトナム人は涙を流さずにはいられなかった…
わが国に、こんな子がいるだろうか…我々も悲劇と苦難の下でも失われない、けなげな日本人の姿勢と負けない力を一少年から教えられた。本当にありがとう…」と。
記事はベトナム中に大変な反響を呼びました。
この記事をきっかけに、決して裕福とはいえないベトナム国民から多くの義援金が日本に殺到したのです。
※ブログ「外国人から見た日本人」より加筆修正